

肥後は「難治の国なれば」

増山雄三

「あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ  
熊本さ 熊本どこさ．．」と続く肥後節を知  
っているのは、昭和一桁に近い生まれの人ぐ  
らいしか知らないと思うが、織豊時代には、  
肥後（熊本県）は「難治の国なれば」などと  
いう言葉が、よく使われていたという。  
それでも、江戸期以来、人材の国として知  
られ、また明治以降は《一人一党》とか《肥  
後モッコス》などと言われ、自分の価値観を  
立て容易に譲らない風土とも言われ、また明  
治時代には、多様な思想家をだしている。  
ところで、豊臣期、秀吉の同僚だった佐々  
成政という人物がいたが、彼は元々秀吉を好  
まず、反抗と降伏を重ねたが、秀吉は彼を殺  
さず、御伽衆という閑職を与え、秀吉が九州  
平定後、秀吉から肥後一国を貰った。

肥後が難治というのは、国人衆の強勢にあつたというが、五十二人の国人が国中に割拠し、地侍たちはそれぞれの国人を、寄親としてその下知に服したが、秀吉の統治の画期性は、それらを一挙に潰そうとしたのだ。

そこで秀吉は、成政に肥後の難治を十分言い聞かせ、「一揆を起こさせるな」と厳命したが、所領を削り検地をしたため、隈部親水という国人が立ちあがり、一揆を起こした。

隈部たちの動員力が二万に対し、佐々方は僅か二千に過ぎなかったが、彼は戦いの玄人だけによく戦い、秀吉の応援を得て、ようやく一揆を鎮圧させた結果、一揆方約千人を斬首したあと、成政も上方に呼び切腹させることとで、肥後人の恨みをやわらげた。

このような肥後人の鬱憤を、「ムシヤ（武者）がよか」という、古い熊本弁で迎えたのが「加藤清正」で、彼が肥後に入ると、肥後人や佐々の遺臣を大胆に採用したので、それも肥後人の痛みをやわらげた。

清正は、土木と財政に長じ、広く農業土木を興して灌漑面積を増やし、さらに彼がやった奇蹟は、「熊本城」という、肥後人が見た事のないような、堂々たる外観をもつ、巨大な城郭を出現させ、この城が出来たとき程、肥後人は清正に対して、「ムシヤがよか」と感じた事はなかっただろう。

次の世の家康は、この清正を腫物に触るように大切に扱い、彼は清正に肥後一国を与えたうえ、さらに、豊後の一部を加えて五十四万石の大身代にし、また、婚姻を通じ清正を取り込もうとしたが、清正が死んでその子の代になると、幕府は加藤家を潰したあと、寛永九年（一六三二年）に細川氏が入った。

細川氏が、スポンジのように京都文化を吸い込んでいた家だった事が、その後の肥後文化に益したが、細川氏は、もとは室町将軍家の縁戚で、初代藤孝（幽斎）は、将軍の御部屋衆として、織田と豊臣家に仕え、出家してからも、従二位という高い位置にあった。

また、幽齋は武略の人でありながら、歌学では当代第一の人物だったし、茶道にも明るく、それをことさら顕示する事なく、諸家よりもかえって武を重んじ、文武両面で、肥後人の心を攫ったといつてよいだろう。

令和三年十一月